

〈書評〉

倉橋惣三・十年祭記念出版

倉橋惣三選集

—全三卷—

平井 信義

近頃、若い保育者に倉橋惣三先生の話をすると、先生のお名前さえ知らない者が多いのに驚いている。これは一体、どういふわけなのだろうか。一つには、保育者の養成課程に問題があることが考えられる。いたずらに新しい技術を追うことに忙しく、わが国の歴史的な基盤に立って保育を考えることをないがしろにしているのではなからうか。その他、倉橋先生の薫陶をうけた者たちが、本当に先生の精神を汲みとり先生の業績を伝えていくという努力を怠つて

いたのではないか。

歴史が進むにつれて、古いものが忘れ去られるということは、ある面では意義がある。新しいものが輝かしい業績をおさめている時には、古いものはとかく影にかくれからである。しかし、現在の保育が、真に輝かしい業績をおさめているといえるかどうか。繁栄の蔭に、意外にも根の浅い浮草のようなものが多いことを、案じている。

倉橋先生の保育界における業績は、まさに不滅であると、私は信じている。私は、先生の晩年に先生の膝下に集まった者であるがユーモアの中からにじみでるその偉大さには、頭がさがると同時に、心暖まる思いで先生のお宅を辞去したものである。このたび、坂元・及川・津守三先生を編者として「倉橋惣三選集」が刊行されたことは、まことに感謝に耐えないし、総ての保育者がこれを通読して欲しいと願っている。本来ならば、全集が欲しいところである。というのも、先生のお手紙には、先生

の面目が躍如としているものが多いからであるが、今回の割愛はやむを得ない。

選集におさめられている「育ての心」と「幼稚園雑草」とは、私が繰り返し読み返した本である私のこれまで持っていた本は、残念ながら戦後再版になったときに買ったものである。戦後物資のなかつた頃のものなので、その紙質も悪いが、既に私の手垢でよごれている。

先生が、幼い子どもたちと生活をともにし、その心に没入して、その代弁をしておられることが、実によく伺える。特に「育ての心」の中の「家庭教育問答」や「いろいろの子ども」は、現在の私の仕事に非常に近いご意見の現われであるだけに、私はこれらを繰り返し読み、殊に行間にふつと表現されている先生の、何ごともないような言葉を、噛みしめてみることに、私の心をひらいてくれる原動力となっている。偉大な倉橋先生。そして、その選集が出版されたことを、心からお祝いしたい。

(フレール館 定価各七〇〇円)